



フレイベル百年記念特集號に序して

日本におけるフレイベル研究を顧る

本誌編集主幹
日本幼稚園協會會長
日本保育學會會長
全國保育連合會顧問

倉 橋 惣 三

本年はフレイベルの逝去（一八二五年六月二十一日）後百年に當る。世界各地においてその記念行事が行われるであらう。日本幼稚園協會もフレイベルに対する衷心の敬慕を以て他の友好諸団体との共催によつて六月二十三日、お茶の水女子大学講堂において、その記念講演会を開くと共に、機關誌『幼児の教育』六月号（第五十卷第六号）を以て、その特集号とする。本会の乞いを容れて、寄稿を快諾せられた広島大学教授文学博士長田新、同大学助教授莊司雅子、頌栄短期大学講師水野浩、お茶の水女子大学講師津守真の四君に、フレイベル尊敬者の名において、その好意を深謝する。長田新君は、日本教育学会會長として、我国教育学の權威者であると共に、フレイベル研究に就ての耆宿である。莊司雅子君は久しきに亘るフレイベル專攻の權威者である。水野浩君と津

守真君とは、共にフレイベル研究における、眞摯な新進学徒である。本誌は之等四君の、フレイベルに關する蘊蓄と、研鑽と、特にこの世界教育界の偉人に対する熱情の文章を以て、本誌を飾られ、特集号の実を挙げ得たことを誇りとする。就ては、編集者としての喜びに促されて、余も亦フレイベル尊重の一老学徒として、日本におけるフレイベル研究の跡を願みつゝ、四友の玉篇を、汚がさざる程度の短文を以て、序章とすることも、特集号の名の下に、寄稿四君と本誌々友諸君の寛恕を冒瀆するわざでもなかるう。これ亦、フレイベルの功業を、我国において讃稱する一つの途でもあるうか。

近藤眞琴の「子育ての巻」

日本に初めてフレイベルの名の伝えられたのを、文獻的に

進れば、近藤真琴著『子育ての巻』(明治八年)が古い。但し、海外の新知を求めるに急であつた明治初年のこととして、当時の新文化人の間に、如何なる先駆者があつたかも知れない。すなわち、これを以て日本におけるフレイベルの名の称された最初と断定する訳でもないが、この明治八年(西暦一九〇〇年)は、フレイベルの逝去(一八五二年)からも、ブラケンブルと幼稚園の創設(一八三七)から数えても、随分早いことと言わねばならない。近藤真琴は天保二年江戸に生れた鳥羽の人で、早くから蘭学を修め測量学に通じ、幕府及び明治政府の海軍教育たること前後二十五年、明治二年公暇を以て攻玉舎(後に海軍予備校として有名)を起し、尋いで海陸の測量研究所を設け、盛んに子弟を教育した。新文化の先進者である。その人が明治六年オーストリアのウキーンで開かれた万国博覧会に出席したとき、そこに出品されていた幼児教育の状況を紹介して著わしたのが、この『子育ての巻』である。その時、氏の紹介し、これを我國にも実現しようとした(実現されなかつたが)育幼院は、明治八年京都柳池校に設けられた『幼稚遊戯場』と共に、必ずしも幼稚園の創めとはいへないとするも、その概則の書き出しに、『惻に聞五洲中文運隆成ヲ以テ称セラレル日耳曼地方ニハ大小幾ノ外数所ノ遊嬉場アリテ学齡未滿ノ稚児ヲ出シ遊嬉娛樂ノ中ニ於テ發明ノ能力ヲ誘導シ……』とあるところから見て、ドイ

ツの實際を範としたもので、その社会施設性性質は、寧ろ見事業であつたらしいが、フレイベル方法の影響を否定することはできないであらう。殊に『子育ての記』には育幼院の他にフレイベルの童子園(キングダールテルの訳)のことが記してある。後にこの子育ての巻のことを書いている、石井研堂の『明治事物起源』に、『幼稚園は日耳曼フレイベルの首唱せしものにて……』とあり、そこにフレイベル精神は紹介されていたものといえる。殊にフレイベルが幼稚園の名を用いる前に、その事業に幼児を遊嬉で教育するところ(幼稚遊嬉場)という意味の名でよんでいた事実なども、このウキーンにおいて近藤氏の見て日本に伝えようとしたものと、フレイベルとが素より関係のあることが信じられるのである。更にもその遊嬉場で用いた教育用具が、フレイベル恩物であるところからも、その関係が認められる。とにかく、幼稚園の名において正面(?)から迎えられる前に、その何年前から、フレイベルは日本に来ていたものといえる。

フレイベル主義幼稚園ニクララ女史

フレイベルの心の底、頭の真髓からの名称といつていへ、キングダールテルの直訳の幼稚園の名を以て、フレイベルが日本に迎えられたのは明治九年(一九〇一年)東京女子師範学校附属幼稚園(後に東京女子高等師範学校附属幼稚園、今のお

茶の水女子大学幼稚園)の設立の日からである。それは第一に、設立の因が、後の文部卿田中不二麿が明治四年文部省理事官として欧米各国の教育事務を検討した結果であり、時の女子師範学校攝理(校長)中村正直が幼稚園創設に力をつくしたことによる。そして、その幼稚園と保母練習科とに迎えられた松野クララが生国ドイツにおいてフレールベルの直伝の生徒であつたことは、日本の幼稚園の第一歩がフレールベル主義に導かれたこと、すなわち、当時の幼稚園教育の研究が一つにフレールベル研究であつたといえる。現に附属幼稚園最初の保母であつた豊田ふゆが、クララ女史の講義を筆記した手記『恩物大意』や、明治十一年保育実習のため同幼稚園に入學した氏原鏡の筆記『幼稚園手引』によつてもそれが明かである。当時の幼稚園の研究は、皆フレールベルの保育原理とフレールベル恩物使用法であつた。

手記類の他に、明治九年文部省刊行の、桑田親五の『幼稚園』東京女子師範学校刊行の関信三の幼稚園記、同十二年青山堂刊行の関信三の『幼稚園法二十遊嬉』等、フレールベルの著述のまゝの訳ではないが、いずれも、フレールベル説そのものである。これらの殊に、明治九年の米國フイラデルフィヤに開催せられた博覧会に、我國文部省から『日本教育史略』と併せて、箱入りの幼稚園恩物が出品せられたことは特筆されるべきである。

かくて、明治初期の幼稚園研究書類が、フレールベルに就ての述作、解説の書物の翻訳が主であつたのに対して、フレールベルの著書の直接の訳書も出るに至つた。

フレールベルの幼稚園Ⅱハウ女史

こゝでフレールベル直伝の使徒クララ女史と共にフレールベルの保育精神と保育方法とのうえつけ者の最重要な一人として、神戸頌栄学園(現頌栄短期大学)のエー・エル・ハウ女史に就て語ることを忘れてはならぬ。ハウ女史はアメリカのボストンの人、若くして保母練習所に学び、明治二十年(一八八七年)米國伝道会社婦人宣教師として日本に來り、明治二十二年(一八八九年)頌栄幼稚園設立と共にその園長の任に就いた。熱心なる基督者であると共に、フレールベル主義に最忠実なる幼児教育者であつて、フレールベル精神を以て頌栄学園を重きにおいたのみでなく、その保母練習所を通して、日本にフレールベル主義を普及せしめる大いなる力となつた。その感化も亦深い。ハウ女史は多くの保育関係書類を著わしたが、フレールベルの主著『母の遊戯及育男歌』の翻訳(明治三十年)刊行と、同じく第一主著『人の教育』の翻訳(大正十四年)とは、我國のフレールベル研究に貢献した功績極めて大きく、厚く感謝されているところである。殊に『母の遊戯と育男歌』の刊行には、歌詞に大和田建樹、松山高吉の助け

を借り、挿画は独逸原版の精神を体して、日本風俗に描きかえられてある等、苦心が拂われていることは、その意の存するところ敬意を禁じ得ない。

フレイベル著書の翻譯

フレイベル自身の著書の翻譯については、ジャパン・キング・ダールカレン・ユニオンの『母の歌と愛撫の歌』（大正十三年岩波書店）と、小原国芳の『フレイベル・人の教育』（昭和四年イヂヤ書院、長田新の『フレイベル自伝』（昭和十二年岩波書店）がある。

『母の歌と愛撫の歌』は Die Mutter und Kose-Lieder の翻譯であり、玉成保姆養成所長ベラ・アルウンの企劃に基き、歌詞は独逸文学者茅野蕭々の訳により、絵画は倉橋がプランケンブルヒのフレイベル博物館から譲り受けて持ち帰つた初版本を、岩波店主故岩波茂雄の古典尊重の精神によつて、原版に忠実に複製せるもの、フリーユフェルの跋文をも添えた、上等紙大版百九十三頁の堂々たる大冊である。恐らく世界に唯一の良翻譯であると思う。殊に歌詞の古き独逸語は、訳者の如き独逸語の大家によつて始めて誤訳なきを得るもの、フレイベル研究者にとつて至宝というべきであり、岩波茂雄君の犠牲的刊行に銘謝しなければならぬ。

『人の教育』は Menschenenerziehung の全訳であつて、

この難解といわれるフレイベルの主著を、チンメル版とレクラム版を参照しあわせて、正確に達意の文章によつて訳せるもの、小原国芳君が前の成城学園長、現在の玉川大学学長として、ヒュマニスムスの教育者としての盛名は世の知るところ、この貴重な古典的教育書を、日本語を以て精読し得ることとは、フレイベル研究者の至幸である。

『フレイベル自伝』は、今日、原著は日本においては勿論ドイツにおいても容易に入手し難いものを、長田君が、初めエミール・ミカエリスの英訳によつて二十余年前に訳し、更にライプテツヒのコメニウス図書館においてその原著を入手することを得、一半をライプテツヒに、後半は帰朝後に訳したという苦心の結晶である。昭和十二年岩波書店から単独の書として出版し、昭和二十四年更に改訂を加えて、岩波文庫の一部として刊行フレイベル研究者を容易に満足させることになつたのは、重々の幸である。長田博士が、広島大学教授として、又日本教育学会会長として、我国教育学の權威であることは更めていうまでもないが、ペスタロツチ研究者、フレイベル研究者として特に著名である。『フレイベルに還れ』の著書は、フレイベル精神の強調せるものとして貴重すべく、その中に收められてあるフレイベルの遺跡めぐりの美しき文章はフレイベル研究者必読の名品といつてよい。尙、序に一言を添えれば、此の書の倉橋惣三訳が、大正三年、フ

レーベル会（今の日本幼稚園協会）の『婦人と子ども』（今の『幼児の教育』）に一年間連載されているが、ミカエリスの英訳によつたもので、訳出の時期は早い。長田訳が原著によつてゐるオーソリチーは一段高く評価さるべきである。

かくて、この三つのフレイベル原著の全訳は日本のフレイベル研究に、大いなる光輝を与えるものである。又、それぞれの訳者皆その人を得てゐることに於いて、日本のフレイベル研究に対する貢献をたゞえなければならぬ。

フレイベルの評傳

フレイベルの評傳としては、長田訳の『フレイベル自傳』は格別として、大正四年倉橋訳によるフレイベルの知己的同調者マレンホルツ・フォン・ビュロー女史の『フレイベル追憶録』が、フレイベル会発行『婦人と子ども』に、一年間を通じて連載せられたのと、岩村清四郎訳ブレイクの『フレイベル伝』（大正六年、頌栄学園）と後藤真造著『教育者としてのフレイベル研究』（昭和五年目黒書店）と、小川正行（今の奈良女子大学幼稚園主事小川正通君の父君）著『フレイベルの生涯及思想』（昭和七年目黒書店）と、及び倉橋惣著『フレイベル』（昭和十四年岩波書店、『大教育文庫』の中）と、前記、長田新著『フレイベルに還れ』（昭和二十五年、フレイベル館）とがある。又莊司雅子著『フレイベルの

教育学』（昭和二十五年・フレイベル館）は書名に明かならなく、フレイベル教育学の詳細な体系的著述として、名著である。莊司女史のフレイベル研究は、今までの久しい業績においても、将来の期待においても極めて大いなるものである。此の他、教育学殊に教育史の諸書中における、フレイベル研究の好資料は少なくないと信ずるが、恐らく一々挙げるに違ないであらう。その一つとして、シュプランガーが、東京女子高等師範学校で行つた講演『国民教育者、婦人の教育者としてのフリードリッヒ・フレイベル』が、シュプランガー著『現代文化と国民教育（岩波書店）』に収録されてあることを特記しておく。——尙、最近の論文として、莊司雅子氏の『フレイベル教育学に於ける労作の構造』が、広島大学教育学研究室編『教育学科学』第八卷（東京・理想社発行）に發表せられてゐる。

むすび

以上、甚だ粗雑な記録であつて、尙お貴重なるものの遺漏なきやを恐れる。その点深くお詫びしなければならぬが此の特集号と記念講演会とを加えることによつて此の短文を飾り得ることは幸である。

（昭和二十年四月記）